

拝啓、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

**感動するドラえものの最終回**を知っていますか？

このドラえものの最終回の話は、平成 13 年の 1 月号の感動新聞に載せました。今から約 8 年前ですね。

私個人的には、一番好きな話です。研修先やいろいろなところでこの文章はよく活用しました。

今回、感動新聞を再開するにこの感動する話を皆さんと共有したく掲載させていただきます。

知っている方も知らない方も何か？人生を生きるヒントになれば、幸いです。感謝。

---

## **感動するドラえものの最終回**

のび太とドラえものに別れの時が訪れます。それはなんと、あっさりと……。

のび太はいつもの様に、宿題もせずに学校で叱られたり、ママに叱られたりしたのかもしれませんが。とにかく、いつものように、あの雲が青い空にうかんでいた、天気の良い日であることは間違いのないことでしょう。

そんないつもの風景でドラえもんが動かなくなったのでした。

当然、のび太にはその理由が分かりません。喋りかけたり、叩いてみたり、蹴ったり、しっぽを引っ張ってみたりしても、何の反応もしないドラえもんを見て、のび太はだんだん不安になってしまいます。

つきあいも長く、そして固い友情で結ばれている彼ら。そして、のび太には動かなくなったドラえもんが、どういう状態にあるのか、小学生ながらに理解するのです。

その晩、のび太は枕を濡らします。

ちょこんと柱を背にして座っているドラえもん。

のび太は眠りにつく事が出来ません。

泣き疲れて、ただぼんやりしています。

無駄と分かりつつ、いろんな事をしました。

出来る事の全てをやったのですが、それでも何の反応も示しません。

泣く事をやめ、ただだまって見つめ続ける少年のび太。

当然ですが、ポケットにも手を入れてみましたが、作動しないのです。

そして、なんで今まで気づかなかったのか、ドラえもんの引き出し、そう、タイムマシンの存在に気がつくのです。

のび太はパジャマのまま、二十二世紀へとタイムマシンに乗り込みます。

これで全てが解決するはずが……

のび太は、なんとかドラミちゃんに連絡を取りつけました。

しかし、のび太はドラミちゃんでもどうにもならない問題が発生している事に、この時点では気がついていませんでした。

いえ、ドラミちゃんですさえも思いもしなかったのでしょうか。

せかすのび太と、状況を完全には把握できないドラミちゃんとはとにかくも二十世紀へ。

しかし、この後に人生最大の落胆をすることになってしまうのです。

動かないお兄ちゃんを見て、ドラミちゃんはすぐお兄ちゃんの故障の原因がわかりました。

正確には、故障ではなく電池切れでした。

そして電池を交換する、その時、ドラミちゃんはその問題に気がつきました。

予備電源がない……。

のび太には、何の事が分かりません。  
早く早くとせがむのび太にドラミちゃんは静かに、のび太に伝えます。

「のび太さん、お兄ちゃんとの思い出が消えちゃってもいい？」

当然、のび太には理解できません。  
なんと、旧式ネコ型ロボットの耳には電池交換時の予備電池が内蔵されており、電池交換時にデータを保存しておく役割があったのです。

そして、そうなんです。ドラえもんには耳がない……。

のび太もやっと理解しました。  
そして、ドラえもんとの思い出が甦ってきました。  
はじめてドラえもんに出会った日。  
数々の未来道具、過去へ行ったり、未来へ行ったり、恐竜を育てたり、海底で遊んだり、宇宙で戦争もしました。  
鏡の世界へも行きました。  
どれも映画になりそうなくらいの思い出です。

**ある決断を迫られます……。**

ドラミちゃんは色々説明をしました。  
ややこしい規約でのび太は理解に苦しみましたが、電池を交換することでドラえもん自身は、のび太との思い出が消えてしまうこと、今のままの状態ではデータは消えないこと、ドラえもんの設計者は、設計者の意向で明かされていないので、連絡しても助けてもらうことは不可能であるという、これはとっても不思議で特異な規約でありました。  
ただ修理及び改造は自由であることもこの規約に記されていました。

のび太、人生の最大の決断をします。

のび太はドラミちゃんにお礼を言います。  
そしてドラえもんは  
「このままでいい」  
と一言、告げるのです。

ドラミちゃんは後ろ髪を引かれる想いですが、何も言わずにタイムマシンに乗り、去って行きました。  
のび太、小学6年生の秋でした。

あれから、十数年……。

のび太の何か謎めいた魅力、そして、とても力強い意志。  
どこか淋しげな目、眼鏡をさわるしぐさ、黄色のシャツと紺色の短パン。  
しずかちゃんが惚れるのに時間は要りませんでした。  
外国留学から帰国した青年のび太は、最先端の技術を持つ企業に就職し、そしてまた、めでたくしずかちゃんと結婚しました。  
そして、それはそれはとても暖かな家庭を築いていきました。  
ドラミちゃんが去ってから、のび太はドラえもんは未来に帰ったとみんなに告げていました。  
そしていつか、誰も「ドラえもん」のことは口にしなくなっていました。  
しかし、のび太の家の押入れには「ドラえもん」が眠っています。

あの時のまま……。

のび太は技術者として、今、「ドラえもん」の前にいるのです。

小学生の頃、成績が悪かったのび太ですが、彼なりに必死で勉強しました。そして中学、高校、大学と進学し、かつ確実に力をつけていきました。企業でも順調に成功し、そしてもっと権威のある大学へ招かれるチャンスがあり、のび太はそれを見事にパスしました。

**そうです、「ドラえもん」を治したい、その一心でした。  
人間とは、ある時、突然変わるものなのです。**

それがのび太にとっては「ドラえもんの電池切れ」だったのです。修理が可能であるならば、それが小学6年生の、のび太の原動力となったようでした。

自宅の研究室にて.....。

あれからどれくらいの年月が経ったのでしょうか。しずかちゃんが研究室に呼ばれました。絶対に入ることを禁じていた研究室でした。中に入ると夫であるのび太は、微笑んでいました。そして机の上にあるそれを見て、しずかちゃんは言いました。

「ドラちゃん...？」

のび太は言いました。

「しずか、こっちに来てごらん。今、ドラえもんのスイッチを入れるから。」

頬をつたう一筋の涙...。しずかちゃんはだまって、のび太の顔を見えています。

**この瞬間の為、まさにこの為に、のび太は技術者になったのです。**

何故だか、失敗の不安はありませんでした。こんなに落ち着いているのが変だと思うくらいのは、静かに静かに、そして丁寧に、何かを確認するようにスイッチを入れました。ほんの少しの静寂の後、長い永い時が繋がりました。

「のび太くん、宿題はすんだのかい？」

ドラえもんの設計者が誰であった理由が、明らかになった瞬間でもありました。あの時と同じように、空には白い雲が浮かんでいました。

...おしまい。

この話は実際にドラえもんの著者藤子・F・不二雄氏の作品ではありません。ドラえもんのファンの誰かが創作で作ったようです。それがインターネット上で広がり、口コミで広がったようです。先日、ヴィレッジヴァンガード(本屋でない本屋さん)にて、ドラえもんのコーナーがあり、ドラえもん「感動編」という文庫本をつい衝動買いしてしまいました。当然この話はありませんが・・・

人生は変われるのです！

それはその人が決断するかどうか？

人生の目的、つまりは「何の為に生きていくのか？」を明確に自分の心に誓った時から・・・

「出逢い」つまりは「縁」を活かすかどうか、人生にとって一番大切なことなんでしょうね。

最後まで読んで頂き、有難う御座います。感謝。